

東京国立博物館所蔵 国宝「孔雀明王像」の原図像の復元に関する研究

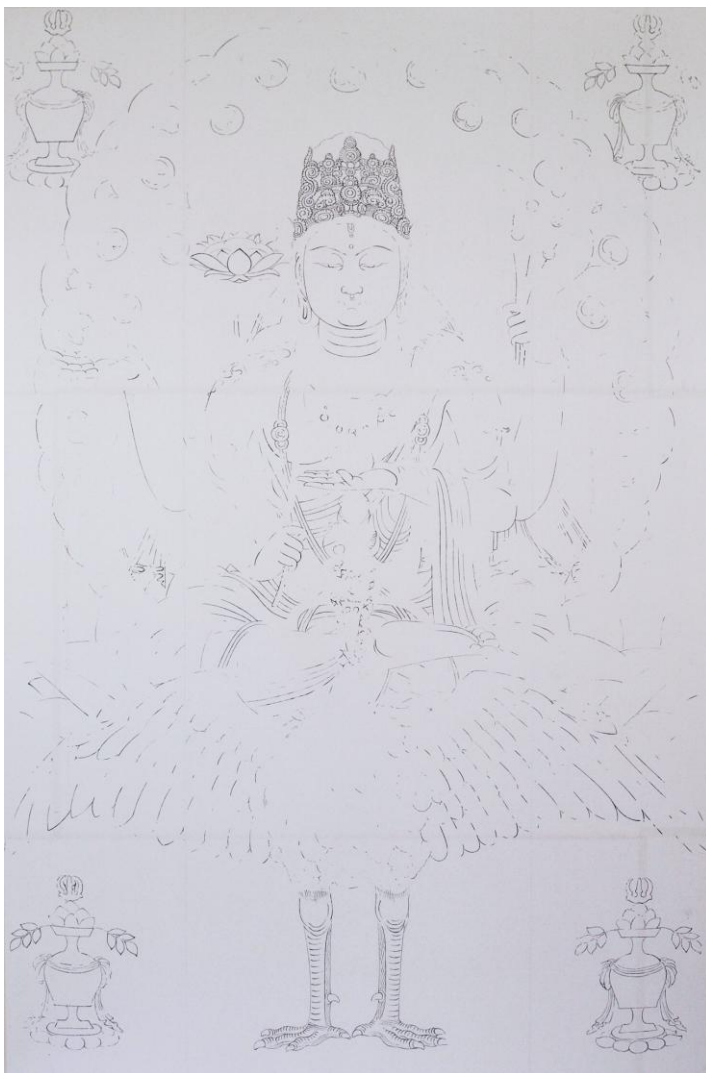
東京藝術大学大学院 文化財保存学専攻（保存修復日本画）

教育研究助手 京都絵美

■ 研究概要

研究対象作品である東京国立博物館所蔵の孔雀明王像（以下、東博本と称する）は平安仏画の優品として名高く、国宝に指定されている。本研究では東博本が彩色前の下描き線と彩色後の描き起こし線とでその図像が異なっていることに焦点を当て、東博本の原図像を復元し、図像変更の背景を考察することを研究目的とした。

■ 東博本の原図像



本研究にあたっては平成6年（1994）に撮影された赤外線画像を使用し、下描き線の復元を行った。赤外線を照射すると、線描に用いられる墨は赤外線の吸収量が大きいので黒く明瞭に写り、彩色前の下描き線を判別することが可能になる。赤外線画像から抽出した東博本の下描き線が左図である。

下描き線の抽出を行った結果、復元された原図像と彩色後の描き起こし線とでは変更箇所が次のように認められた。

- ・{孔雀明王} 眉、目、口、顎のくぼみ、髪際、垂髪、双鬢、手足の形
- ・{装身具} 宝冠正面の垂飾、胸飾正面の垂飾、胸飾につけた紐飾り、瓔珞、冠繪
- ・{持物} 左第一手の吉祥果、左第二手の孔雀尾、右第一手の未敷蓮華と荷葉
- ・{孔雀} 頭部の形、目、嘴、冠毛、胴体の鱗状の羽根、両翼初段の表現、翼の羽根の重なり方

さらに、原図像と日本に現存する孔雀明王像の諸とを比較した結果、鎌倉時代に制作された京都智積院所蔵孔雀明王像（以下智積院本と称する）と酷似していることがわかった。東博本と智積院本は法量も近く、同一の原本に基づいたと考えられる。

■ 想定復元模写

密教では図像の相伝が重要な意味を持つ。日本の孔雀明王画像は空海が弘仁12年に供養した孔雀明王像が根本画像となり、その図様は「大師様」として重んじられてきた。空海が請来した不空訳『仏説大孔雀明王画像壇場儀軌』では、「明王は四臂で慈悲相に表され、白い衣を纏い装身具で荘厳される。金色の孔雀上の蓮華座に結跏趺坐し、四臂にはそれぞれ開敷(かいふ)蓮華、俱縁果、吉祥果、孔雀尾を持つ。」と説く。

孔雀を金色で表す例は少ないものの、日本で制作された孔雀明王画像はすべてこの儀軌に依った一面四臂像である。これをみると、東博本は図像としては儀軌に従っているものの、色調では忠実でないことがわかる。

原図像を彩色するにあたっては、東博本の表現の特殊性を明らかにするため、この儀軌に依った色彩表現を採用した。

■ 結論

日本で制作された孔雀明王画像はその大半が空海が供養した画像の系統である「大師様」に位置づけられる。その他の諸本のうち、醍醐寺所蔵白描孔雀明王図像（以下、醍醐寺図像）と文化庁保管孔雀明王像（以下、文化庁本）、別尊雑記所載の白描図像は同一の系統であることが注目される。（ここではこれらを「醍醐寺系統」としておく。）

二つの想定復元模写を制作した結果、復元した原図像と東博本とを比較すると、先に挙げた図像の変更箇所が多くが、醍醐寺系統の表現に一致することがわかった。

文化庁本は平安末期、醍醐寺図像は鎌倉期に入ってから制作と考えられており、両本とも東博本より年代は下がる。しかし醍醐寺図像は醍醐寺初代座主観賢の所持本の写しと伝承されてきたもので、11世紀後半ころには醍醐寺において祈雨のための孔雀経法の本尊として相伝されていたものと解釈される。とすれば、醍醐寺系統の原本あるいはその系統本が、東博本の図像が変更される際にその表現の典拠となった可能性は否定できない。以上のことから本研究は東博本孔雀明王像を従来位置づけられてきた大師様画像の系統には含めず、大師様画像に醍醐寺系画像を重ねた「折衷様」であると結論づける。

大師様は仁和寺で相伝されてきた図像であり、広沢流（仁和寺系）と小野流（醍醐、勸修寺系）は真言密教の双璧であった。東博本が両流の図像を統合していると考えたとき、その発願者にはこれより上位の存在、つまり天皇（院）を想定するのが自然であるように思われる。またそれに加え、醍醐寺系の図像を折衷していることは当時の真言密教界の横軸のつながりを表すものであり、とりわけ、小野流の法流を受けた高僧が制作に関与したことが想定される。



東京国立博物館所蔵 国宝「孔雀明王像」想定復元模写



東京国立博物館所蔵 国宝「孔雀明王像」下描き線および儀軌に基づいた想定復元模写